

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18720190

研究課題名(和文) 考古資料・石刻史料を用いた契丹(遼)仏教史の研究

研究課題名(英文) A Study on History of Buddhism under Qidan(Liao) Dynasty Based on Archeological Materials and Stone Inscriptions

研究代表者

古松 崇志 (FURUMATSU TAKASHI)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：90314278

研究成果の概要：

10世紀から12世紀前半までユーラシア東方の盟主として繁栄した契丹国では、支配者集団から郷村レベルの民衆にいたるまで、仏教信仰が社会のすみずみまで浸透していた。本研究は、中国の内モンゴ・遼寧・北京・河北などで最近新発見があいついでいる当該時代の考古・石刻資料を活用して、契丹支配下における仏教と国家・社会とのかかわりを多角的に明らかにすることを目指した。慶州白塔をはじめとするいくつかの史資料の個別具体例を精査・分析することによって、未知の新史実を掘り起こし、今後の当該分野の研究の基本的な方向性を示した。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,300,000 | 0 | 1,300,000 |
| 2007年度 | 1,200,000 | 0 | 1,200,000 |
| 2008年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,600,000 | 330,000 | 3,930,000 |

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：契丹、遼、仏教史、石刻資料

1. 研究開始当初の背景

これまでの契丹仏教史研究は以下のように展開してきた。(1)戦前日本人による研究：本格的な契丹仏教史研究は大陸進出との関わりから戦前日本人によって始められた。考古資料もこのころから活用され、鳥居龍蔵をはじめとしていまなお参照に値する基礎的な調査研究が行われている。(2)戦後70年代まで：日中両国ともに研究は停滞した。考古研究は継続し、重要な発見もあったが、資料が大々的に公開されることはなかった。

(3)80年代以後：中国で改革開放政策が推進され、陵墓・都市・寺院遺跡・碑刻など新たな発見があいつぎ、また70年代までの重要発見も含めた各種の考古資料の報告書が出版され、石刻史料に関わる専著や論文も陸續と発表されて、利用可能な考古資料は激増した。日中の研究者によるこれら新資料を用いた研究も現れ始めたが、90年代以後現在に至るまで、考古資料はいっそう増加している。

以上のような近年の史料状況の改善のもと、戦前日本人による成果を含めたこれまで

の考古学の成果を総括したうえで全面活用することにより、契丹の歴史像を大きく塗り替えることの可能な新たな研究段階に立ち至っている。しかし、これまでのところこの新たな史料状況に対応した本格的な契丹仏教史研究は出現していない。

2. 研究の目的

前項に述べた研究の現状をふまえ、本研究では新たな史料状況に対応するべく、基礎作業として仏教にかかわる考古資料のデータの網羅的な収集・整理を行い、今まで知られていない契丹仏教史についての新たな史実の掘り起こしをおこなう。

こうした研究をつうじ、仏教にとどまらず、典籍文献史料の貧困により謎の多い当該時代の政治や社会について考察するための具体的な材料を提供することも期待される。

また契丹と北宋・高麗・西夏・ウイグル・日本などとのあいだの仏教文化交流の実態を明らかにすることにより、当時の契丹を中心とするユーラシア東部における国際関係の考察にも資することも意図している。

そして、契丹仏教にかんする史資料を網羅して個別に分析するとともに、前代の唐代、同時代の北宋、後代の金・南宋・元、高麗・西夏・ウイグル・日本といった他の時代や地域の仏教との比較研究を行うことによって、複眼的な視点をもって、契丹仏教の特徴を明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1) 公刊されている考古学雑誌や考古学専著にみえる考古発掘報告、国内外各所蔵機関に収蔵される清代・民国期の地方志・石刻書、石刻史料を集成した専著など各種文献・出版物に著録される契丹関連石刻にかかわる資料を網羅的に収集して、研究の基礎とする。この基礎作業を通じて、契丹の石刻史料を総体把握した。

(2) 仏教に関する石刻史料には、高僧の事跡を記した碑誌、寺院の創建や修繕にかかわる記念碑、死者の極楽往生などを祈念する陀羅尼経幢、経典を石に刻んだ石経などさまざまなものがある。前項の基礎作業をふまえたうえで、これらのうちの重要な碑刻から順次取り上げて、一件ずつ詳細な研究をおこない、文献史料ではうかがうことのできない契丹仏教の具体例を提示し、多くの未知の史実を新たに明らかにした。

(3) 石刻史料以外の仏教考古資料については、内蒙古自治区赤峰市巴林右旗に位置する慶州白塔、遼寧省朝陽市に位置する朝陽北塔などをはじめとする塔にかかわる文物(塔の建築、塔内から発見された小塔、陀羅尼経幢、

陀羅尼経典、仏像(壁画・線刻・彫像を含む)、金銀器・陶磁器などの工芸品など)が近年多数発掘・発見されている。文献史学のみならず、考古学・美術史といった多方面からのアプローチによる成果も参照してこれらの文物に関連する文献を収集・把握し、契丹仏教史にかんする多角的な知見を深めた。

4. 研究成果

当初の計画にもとづき、契丹仏教史にかかわる考古・石刻資料のうち、重要なものを取りあげて、個々の史資料を詳細に解読・分析することによって、契丹仏教史研究にいくぶんの新知見をもたらした。具体的には以下のようなもの。

(1) 中国内蒙古自治区赤峰市の北方に現存する慶州城遺址は、11世紀前半に契丹国第六代皇帝聖宗(耶律文殊奴)を葬った陵墓慶陵の奉陵邑として建設された城郭都市の遺跡である。城内に唯一残る11世紀以来の建造物が通称白塔であり、1988年から1992年まで5年かけておこなわれた塔刹部分の解体修理によって、塔創建時に奉納された碑刻、経典、合計108基小型の舍利塔、仏像、香葉、織物などおびただしい数の文物が発見された。碑刻に記された文字記録より、この塔が1049年に第七皇帝興宗(耶律夷董)の母章聖皇太后によって建立され、釈迦仏舎利塔と呼ばれる塔であることが判明した。本研究では、この塔刹から発見された『無垢浄光大陀羅尼経』と呼ばれる陀羅尼経典の内容を精査することをつうじて、従来不分明であったこの塔建立の最大の目的が、先帝聖宗皇帝の追善供養にあったことを解明した。また、塔刹中央に安置された銀鍍金製のひときわ大きく豪華な舍利塔の側面には、塔の門扉をはさんで供養人の男女が向き合って線刻されているが、従来の研究でこの人物が誰かまったく考察されることがなかった。本研究において、二人の人物が塔の創建にかかわった章聖皇太后と興宗皇帝その人の姿を刻んだものであることを明らかにした。従来契丹皇族の姿を描いた肖像画はまったく残っておらず、今後の契丹美術・考古研究のためにも、きわめて貴重な文物であると評価することができるだろう。

(2) 契丹国の姻族蕭氏(国舅族少父房)出身の妙行大師志智という契丹人高僧の事跡を、満洲国時代に発見された碑刻史料にもとづきあつづけた。思孝という当代きっての高僧に学んだ志智は、自分の同族である第八代皇帝道宗の懿徳皇后およびその一族より莫大な寄進を受け、道宗皇帝の勅を奉じて燕京(現在の北京)に巨刹大昊天寺を創建したことで知られる。大昊天寺は、のちの金・元時代にも国家規模での法会がおこなわれるな

ど、都となった当地（中都・大都）における屈指の大寺院として重要な位置を占めつづけたが、その起源は仏教が隆盛をきわめた契丹時代における勅建寺院として創建されたことにあった。この大昊天寺の創建とその後にかんする研究は、今後、一一世紀から一四世紀にかけて、遼・金・元代における北京地区仏教の連続性を解明していくために、重要な起点となるものである。

(3) 契丹国は、遊牧国家に特徴的な連合体としての性格を一貫して持ち、皇帝が有力な王族・部族・官僚・軍人などに遊牧地の所領を与える分封制度がおこなわれていた。こうした分封地を得た契丹王族が契丹の本拠地に営んだ寺院にかんする情報を伝える「創建静安寺碑銘」という碑刻資料の研究をおこない、草原で遊牧生活を営む契丹王族と仏教とのかわりについての具体例を紹介した。静安寺とは、契丹国の開祖耶律阿保機の弟刺葛の子孫が建てた寺院である。刺葛の子孫一族の集団は、契丹国の皇族であることを示す「大横帳」という称号と呼ばれ、契丹国連合体の重要な部分を占めており、五京のひとつ中京の北に分封地（所領と都市）を保有している。近年一族の墓地も発見されている。静安寺の位置はこの墓地から 60km 以上離れた場所にあり、当時の契丹王族の分封地あるいは生活圏の広がりを示唆する。碑刻の記述は非常に具体的で、相当規模の財産と立派な伽藍をそなえた寺院が営まれていた事実を伝えており、契丹王族の仏教信仰の具体的なありかたを知るためのきわめて貴重な史料である。

(4) 北京市西郊の馬鞍山山腹に位置する戒臺寺に残る碑刻資料をもちいて、当地が契丹国支配下にあった時代に活躍した法均（1021-1075）という高僧の事跡の詳細な研究をおこなった。遺行碑と呼ばれるこの碑は、15 世紀半ばの明代に馬鞍山の寺院が再建されたのにもない、寺の古くからの由緒を強調するために立て直されたものである。この碑や関連の碑刻史料の記述によれば、法均が 1070 年に馬鞍山にやって来て、慧聚寺を創建し、僧俗・男女・身分を問わずあらゆる衆生に大乘菩薩戒を授ける戒壇を開設すると、受戒を求める人々が大挙して押し寄せた。さらに、契丹国内各地の拠点都市にも出かけていって、多くの人々に菩薩戒を授け、彼の菩薩戒に対する熱狂は国中に広がった。噂を耳にした道宗皇帝（耶律湜隣）もまた、自身のもとに呼び寄せて、その母の皇太后とともに法均に対し弟子の礼をとり、官号と「伝菩薩戒壇主」の称号を賜り、絶大な保護を与えた。法均の没後には、菩薩戒授与のさいに用いられる皇帝御製の戒本が彼の後継者に与えられ、代々受け継がれて、馬鞍山慧聚寺は国家による手厚い保護を受け続けた。馬鞍山の菩薩戒壇の隆盛の背景には、当時の菩薩戒流行

があった。興宗・道宗・天祚帝の三人の皇帝はいずれも菩薩戒を受けており、遊牧民の習慣にもとづき季節移動を行って生活する契丹皇帝の幕営地（捺鉢）では、しばしば高僧が国内各地から招聘されて戒壇が設けられ、皇帝に随従する王族や官僚たちに菩薩戒を授ける法会が開かれた。菩薩戒はこうした支配者集団のみならず、都市から鄉村まで契丹国内の広い範囲で流行し、社会的な反響は甚大だった。また、法均の遺行碑および新城県にかつてあった経幢の二つの石刻史料は、法均から菩薩戒を受けるために馬鞍山の戒壇を目指して、契丹に隣接する宋や西夏から国境を越えて密入国する参詣者が数多く存在したという事実を語っている。このことは、11 世紀後半における澶淵の盟（1004 年締結）を主軸とする国際秩序の安定のもと、国境を越えた人間の移動や交流が想像以上に盛んであったという実態を示すものである。

(5) 古来「中華本土」の北辺に位置し、農耕地域と遊牧地域の接壤地帯にあたる燕京地方（現在の北京地区）は、唐においてはその東北辺境地帯を構成したが、10 世紀前半に契丹領となった結果、北方から南方へと膨張していく契丹国の前線辺境地帯に変貌した。10 世紀半ばから 11 世紀初頭に至るまでは、契丹と南方の政権（五代～宋）とはおおむね緊張関係にあり、燕京地方は対南方の最前線として臨戦態勢のもとに置かれていた。そのため 9 世紀までの唐代幽州の基礎をふまつつ、契丹における政治・軍事上の南の中心地として国家の手により大規模な資本投下がおこなわれ、おおいに発展をとげた。1004 年の澶淵の盟により契丹と宋の平和共存体制が確立すると、緊張の緩和により両国国境地帯の辺防は弛緩し、平時体制に移行するが、その後も燕京は契丹国内最大の人口を擁する都市として繁栄をつづける。こうした繁栄の背景には、国家が肥沃な農業生産地をゆるやかに統治したことにくわえ、物資集散地となった燕京を中心に商業振興政策を推進したことがあったとみられる。さらに、澶淵の盟以後には契丹は宋から歳幣を得て、権場での管理貿易を宋とのあいだでおこなったばかりでなく、密貿易もさかんにおこなわれ、人・モノ・情報が国境を越えて行き交い、国境地帯は活況を呈した。そして、さまざまな碑刻史料が伝える契丹燕京地方の仏教寺院興隆の事実は、まさしくこうした状況を映し出したものである。以上のような視点から、燕京地方における商業と仏教のかかわりについて、複数の碑刻・考古資料を用いた研究をおこない、現在論考を準備中である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

古松崇志、考古・石刻資料よりみた契丹(遼)の仏教、『日本史研究』第 522 号、42-59、2006 年、査読有

古松崇志、慶州白塔建立の謎をさぐる 11 世紀契丹皇太后が奉納した仏教文物、『遼文化・遼寧省調査報告書 2006』京都大学大学院文学研究科、133-175、2006 年、査読無

古松崇志、法均と燕京馬鞍山の菩薩戒壇契丹(遼)における大乘菩薩戒の流行、『東洋史研究』第 65 巻第 3 号、1-38、2006 年、査読有

古松崇志、契丹・宋間の澶淵体制における国境、『史林』第 90 巻第 1 号、28-61、2007 年、査読有

古松崇志(李済滄訳)、契丹、宋之間澶淵體制中の國境、『日本中国史研究年刊』2007 年度(上海古籍出版社) 128-170、2009 年、査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

古松崇志、契丹・宋間の澶淵体制における国境、史学研究会例会、2006 年 4 月 22 日、京都大学

古松崇志、契丹燕京地方における商業と仏教、第九回洛北史学会定例大会、2007 年 12 月 1 日、京都府立大学

古松崇志、契丹・宋間の澶淵体制における国信使と外交儀礼、第九回遼金西夏史研究会大会、2009 年 3 月 14 日、京都大学

〔図書〕(計 1 件)

古松崇志、京都大学大学院文学研究科学位授与論文、一〇～一四世紀ユーラシア東方の国家と社会、2008 年、527 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古松 崇志 (FURUMATSU TAKASHI)
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：90314278

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者